

教科・領域教育専攻
言語系（国語）コース
宮本浩子

指導教員 村井万里子

1 研究の目的と研究の方法

1998年頃から、小学校6年間を見通したカリキュラム作りが研究課題となり、国語の力の系統表等を作成してきた。そこで作り上げられたカリキュラムに、次のような疑問を感じた。

1) カリキュラムが、実践者の発達観や指導観を直接反映していないこと。理で押し立てられたカリキュラムであり、子どもを主体とした日々の授業の中から生み出されたカリキュラムではない。

2) 思考と学びの質的な深化を促すカリキュラムになっていないこと。

本研究では、芦田恵之助の『小学国語読本と教壇』（昭和8年～昭和13年）に着眼した。16年の教員生活、教科書編纂、7年間の教壇行脚といった芦田恵之助の経験と実践を注ぎ込んで書いた教授参考書である。指導のマニュアルを示そうとしたのではなく、教壇の中から生み出された読むことのカリキュラムを具現化しようとした。そこには、「小学国語読本」の教材編纂では見えない、どう読み深めていくか、どう理解を図っていくかといった系統が見られる。

『小学国語読本と教壇』において、①それぞれの授業の核となる問いは何であるか、②継続した指導の中でどのような力を育てようとしているのかを明らかにした。そして、そこから帰納的に読むことのカリキュラムを導き出した。その際、『理解をもたらすカリキュラム設計

(Understanding by Design)』で、ウィギンズとマクタイが提唱している、「本質的な問い」と「重要な知識とスキル(Important to know and do)」を分析の視点とした。「本質的な問い」とは、読むことの真髄に迫るための問いである。「重要な知識とスキル」は、「本質的な問い」の追究を支える読むことので力である。

2 「本質的な問い」の系統

芦田恵之助は、説話教材では、次のような「本質的な問い」を授業作りの中核に据えている

尋 1	巻 1	ことば（「てには」一つ）に、登場人物の心を読もう。
	巻 2	登場人物に同一化しながら（善いもの、悪いものもともに）こころの推移を読もう。
尋 2	巻 3	「わが身に落として」、登場人物の心情を考えよう。叙述に表れた心情を読み取ろう。
	巻 4	いろいろな立場や視点から、登場人物の心情を読み取ろう。
尋 3	巻 5	物語全体を貫くものは何か考えよう。登場人物の言動の背後にある状況を読み取ろう。
	巻 6	物語の事実にもこもる心情や、事実の底に流れている人間の姿を見つめよう。
尋 4	巻 7	読む中で、自分が考えてみなければならないことは何か。自分はどうか考えるのかを意識しながら読もう。
	巻 8	読む中で、本当に読まなければならないのは何なのか。言外の余意、筆者の思いが見えることば、構成の工夫に着眼しよう。
尋 5	巻 9	各課に描かれている「人間の問題」について考えよう。ことばの意味、書かれていない情報により物語の味わいを深めよう。
	巻 10	各課に描かれている人物の精神、思想を読み取ろう。さまざまな生き方を見つめる目をより鋭くしよう。

尋	巻	なぜ、そのように生きることができるのか。
6	11	自身の生きることへの問いに対する答を見出そう。既習の課と総合しながら読みを深めよう。
	巻	各課を通して、生きることとことばの結びつきを考えよう。ことばの力を考えよう。
	12	

巻1「ことばに心を読む」ことに始まり、巻8「書かれていない（言外の余意）ことばを読む」へと展開し、巻11「自身の生き方を見つめる」や巻12「生きることとことばとの結びつきを考える」ことへと発展していく。この展開は、自己の生き方に重ねて読むことの階梯になっている。また、これらの問いは、それぞれの発達段階における子どもの思考の特徴を見事に捉えている。

同様に、韻文教材では、巻1「作者の気持ちを読む」から、巻12「作者のものの見方の深さをさとる」ことへと展開される、詩を味わうことの系統が見られた。生活教材では、「本質的な問い」が、読み方と綴り方との二本柱になっている。生活教材が、理解の対象であると共に、綴り方学習の教材としての位置を持っていた。巻1の「ことばに生活の姿を思い浮かべよう」（読み方）、「自分の生活に置き、書き換えてみよう」（綴り方）に始まり、巻12「～観を形作ろう」へと発展していく、社会や自然を見つめることの系統が見られた。

3 「重要な知識とスキル（活動）」の系統

- 芦田恵之助のカリキュラムにおいて、次の3つが読みを深めるうえで重要な力となっている。
- 読みの速さ（速く読む力、あえてゆっくり読む力）、読み方（全体の読みを繰り返す力、場面ごとに丁寧に読む力）
 - 視写・暗誦・暗写の力（視写により作者の息づかいを感じ取る力、作者の気持ちを思い浮かべながら暗誦する力など）
 - ことばの力（助詞・助動詞の意味を語感を用いて捉える力、主語・述語により概要を捉え

る力、副詞の意味を見いだす力など）

これらは、「本質的な問い」と密接に結びつきながら、系統付けられている。

読みの速さには、次のような系統が見られる。

巻1～3	じっくり時間をかけて文字を読む。
巻4～6	テンポ良く読み進める。
巻7～8	（あえて）ゆっくり内容を読み取る。
巻9～ 12	速く読む力と、意図的にゆっくり読む力を使い分ける。

巻3までは、子どもに文字を読む力が十分に育つのを待つ。巻4から巻6にかけて、物語全体を貫くものを読むために、ある程度の速さで全文を読み通す。これによって、読む楽しさが存分に味わえるようになる。巻7から巻8にかけて、速く読む力が育った子どもにあえてにゆっくり読む力を育てることにより、読み深める力を授ける。巻9以降は、意図的に読みの速さを使い分ける力がついた上で、ゆっくり読むべきところを発見しながら読ませていく。

学習指導要領などには示されていない、読みの速さを使いわけける技術が、読みを深めるうえで欠かせない力として位置づけられている。

4 研究のまとめ

芦田恵之助『小学国語読本と教壇』のカリキュラムには、次のような今日的意義がある。

- 思考力と読みの質的な深まりを導くのは、「本質的な問い」である。
- カリキュラムは、実践から帰納されるべきものであるという芦田の主張の具体化が実現されている。
- 読みの速さ、読み方、視写・暗誦・暗写の力、ことばの力を、発達に応じて指導する中で、読みの力は育つ。
- 芦田恵之助の読むことのカリキュラムは、それぞれの学年に応じた単元を構想する際の指針となる。